

やっと引揚げて来た喜びを味わう間もなく、人生最大の悲劇に見舞われた私は、男一匹となってしまった。それから一か月、半年、一年と、もしや帰って来るのではないかと、淡い望みの中に経ってしまった。二年も過ぎたが、音沙汰はない。ほかの同僚の通信も同様の悲報である。不本意ながら、二か年目の旅立の十月八日を忌日と仮定し、5人の仮葬儀を、悲しみも新たに執り行った。ただ宿命とあきらめる他はなかった。

第二の人生戦後三十年の私の理想

亡くなった家族五人とともに引揚げておれば死んでいいのだ。生き残った命は儲けものだから、余生を社会のために働こうと決心し、再婚して以来武士の商法ながら職を通じて、奉仕奉仕の三十年、事業も意外に伸び、入手した土地が時代のお陰で高騰したので、約四億円以上の土地を赤穂市へ社会福祉のために寄附した。市はこれを塩谷隆徳基金として、私亡き後まで利用することに決定した。これが私の理想であり、亡き家族への供養かと自慰している。

終戦後四か月間の京城の思い出

岐阜県 石神 正雄

私は二百三十部隊に召集兵として入隊しておりましたが、終戦と同時に部隊本隊は帰国することになり、毎日釜山に向かい南下しました。私たち現地入隊者は林大佐以下二十六人残留し、兵器の菊の紋章を削りその処分に追われる日が続きました。食糧品の買い求めに京城の街に出る時は小隊編成を組んで外出せねば危険でありました。市電には、日の丸の旗を二つ巴の朝鮮の旗に塗り替え手に手に持ち、無数に乗り込み無警備状態。警察署の日本人はほとんど逃げ帰り、除隊した朝鮮兵が直ちに警察官となり治安維持に就いておりましたが、不安な街に化しておりました。

数か月前までは何の差別もなく親子兄弟のように付き合い合ってきたのに、敗戦の無惨さに腹立ちを感じるようになった。十月末ごろまでに日本人家族の大半は本国に引き揚げ、残留家族は一日として不安を感じずにおられず、一

日も早く引き揚げたい気持ちの毎日であった。

ある夜、八時ごろ、我が家の戸を叩く者があるので開けてみると、部隊で一緒であり除隊後平壤に戻った西部・大野兩人であった。見れば、頸には除隊後一度も刺ったことのない鬘を生やし、十月から共產教育が始まったので逃げ出し、昼は山道を辿り、夜は街道に出て大根を盗み取りして食べる十五日間の逃避行の苦勞話は尽きない。二人には服を一着あて与え、その間に家内が準備した食事を出し、空腹を満たしてもらおうとやっとな堵の顔を見せました。

近くの大衆浴場で垢を落としてきてもらい、九時五分戻ってきたので門戸を開けると西部君一人だった。後から帰った大野君が施錠しなかったので、後を追ってきた十五人位の朝鮮人がピストルや短刀を持ちドヤドヤと入ってきて、奥の部屋にいた西部と私にピストルを突きつけ両肩に短刀を押しつけ、「お前たちの階級は調べてある。凶器はどこに隠してあるか。これから床下を見る。」と言いながら、短刀を畳に突き差し三十センチほど引き起こし、一人の男が押し入れの襖を開け皆に入れと言い、

私の背にも短刀を突き付けられて中に入り襖を閉めると、「一時間声を出さずにおれ。」と言いながら部屋を通るたびに短刀を襖に突き差し、竹籠のように穴だらけになりました。三十分位経って音が聞こえなくなったので西部君が真っ先に飛び出し、続いて皆出てみると奥の間・中の間・玄関まで開けはなし、箆の中にはタオル一本もないように持ち去った。あっと思いついたのが現金を縫い込んだリュックサック、これもなくなっている。一時間半ピストルを突き付けられ青い顔で一言も言わなかった家内が、「何もかもとられて、どうするの。」と言いはじめた。

夜明けを待ち本町署に行き手続きをして、大和町の憲兵隊に行ってみたら四人の憲兵が残っているのみ。引き揚げについてなら竜山の軍隊引き揚げ事務所に行つて相談すればなんとかなるとの返事なので、翌朝、早速食事をすまして竜山の事務所に行った。都合よくそこに部隊で一緒だった座山軍曹がおったので訳を話したところ、今日十時三十分軍の臨時列車が出るから軍人家族として組み込めるが、本当に今日帰るかとのこと。ぜひ頼む

とお願ひし家に引き返し、子供のためにと毛布一枚持って竜山駅に行き列車に乗ることができたものの、列車は何度も途中で停車し、それでも一時間前に先発した列車を追い越し清道駅に着いた。

ところが、ここで機関車故障とのことで、午後六時に着いてから翌朝になっても発車の模様がない。総指揮官から各車両にいる班長に、各自飯盒炊さんし腹ごしらえをするようにとの命令。食事を済まし、昨夕は部落民の襲撃はなかったが今夜は大変だと心配になり、対策協議をしていると、午前十一時駅員が来て、どうも故障ではないようだ、少し金を渡せば発車するようだとのこと。各班長が集まり相談の結果、一世帯五十円ずつ出し合い二万余円を渡すと十分後にポーと動き出す。馬鹿げたことで、機関士と駅員がグルになっていたことに気づいた。追い越し追い越されながら各列車は釜山に着いたが、昨日の引き揚げ者も検査に時間がかかりまだ乗船できない始末なので、引き込み線に入っていると、夜中に襲撃を受けカメラ・時計・現金も略奪される等、その上、内地に上陸後の落ち付く先や生活のことなど、心配話ばかり

であった。

裸の人生行路

山形県 佐藤 寅 蔵

尋常高等小学校を卒業したのは、昭和四年三月であった。その時日本は大不況に遭遇し国内全土に不況の大嵐が吹き荒れていた。官吏の減俸、会社企業では従業員の解雇、これにともない大都会では失業者が街頭にあふれていた。それに東北では冷害による農作物の凶作が続き農村の疲弊がどん底に陥り、年貢米を納めると食べる米が無く悲惨な状況であった。又、小学校では欠食児童が続出し、一方では可愛い我が娘を花柳界へ身売せるものが続出していたことが、今でも記憶に残っている。私はこんな時代に社会に放り出され生家で農業の手伝いすることとなった。

私は五人兄弟の末子に生れ将来農業で生計を立てる意志は全く無く、自分自身で自活の道を考えたのである。